

# 死後

芥川龍之介

青空文庫



……僕は床へはいつでも、何か本を読まないで、寝つかれない習慣を持っている。のみならずいくら本を読んでも、寝つかれないことさえ稀まれではない。こう言う僕の枕もとにはいつも読書用の電燈だのアダリン錠じょうびんの罫びんだのが並んでいる。その晩も僕はふだんのように本を二三冊蚊帳かやの中へ持ちこみ、枕もとの電燈を明るくした。

「何時なんじ?」

これはとうに一寝入りひとねいした、隣の床にいる妻の声だった。妻は赤児あかこに腕うでまくら枕まくらをさせ、ま横よこにこちらを眺めていた。

「三時だ。」

「もう三時。あたし、まだ一時頃かと思っていた。」僕は好い加減な返事をしたきり、何ともその言葉に取り合わなかった。

「うるさい。うるさい、黙って寝ろ。」

妻は僕の口真似くちまねをしながら、小声にくすくす笑っていた。が、しばらくたつたと思うと、赤子の頭に鼻を押しつけ、いつかもう静かに寝入っていた。

僕はそちらを向いたまま、説教せつきょう因縁いんねん除睡鈔じよすいしやうと言う本を読んでいた。これは和漢

天竺てんじくの話はなを享保頃の坊さんの集めた八巻ものの随筆である。しかし面白い話は勿論、珍らしい話めつたも滅多めつたにない。僕は君臣、父母、夫婦と五倫部の話を読んでるうちにそろそろねむけ睡気を感じ出した。それから枕もとの電燈を消し、じきに眠りに落ちてしまった。――

夢の中の僕は暑苦しい町をSと一しよに歩いていて、砂利を敷いた歩道の幅はやつと一  
間か九尺しかなかった。それへまたどの家も同じようにカアキイ色の日除けを張り出して  
いた。

「君が死ぬとは思わなかった。」

Sは扇を使いながら、こう僕に話しかけた。――いちおう応は気の毒に思っても、その気も  
ちを露骨に表わすことは嫌っているらしい話しぶりだった。

「君は長生きをしそうだったがね。」

「そうかしら？」

「僕等はみんなそう言っていたよ。ええと、僕よりも五つ下だね、」とSは指を折って見  
て、「三十四か？ 三十四ぐらいで死んだんじや、」――それきり急に黙ってしまった。

僕は格別死んだことを残念に思っはてはなかつた。しかし何かSの手前へもはず羞かしいよ  
うには感じていた。

「仕事もやりかけていたんだろう？」

Sはもう一度遠慮勝ちに言った。

「うん、長いものを少し書きかけていた。」

「細君は？」

「達者だ。子供もこの頃は病気をしない。」

「そりやまあ何よりだね。僕なんでもいつ死ぬかわからないが、……」

僕はちよつとSの顔を眺めた。SはやはりS自身は死なずに僕の死んだことを喜んでい  
る、——それをはつきり感じたのだった。するとSもその瞬間に僕の気もちを感じたと見  
え、厭いやな顔をして黙もってしまった。

しばらく口を利きかずに歩いた後、Sは扇あふに目を除よけたまま、大きい缶かんづめ屋の前に立ち  
止とまった。

「じゃ僕は失敬する。」

缶かんづめ屋の店には薄暗い中に白菊が幾鉢も置いてあつた。僕はその店をちらりと見た時、  
なぜか「ああ、Sの家は青木堂の支店だった」と思った。

「君は今お父さんと一しよにいるの？」

「ああ、この間から。」

「じゃまた。」

僕はSに別れてから、すぐにその次の横町を曲つた。横町の角の飾り窓にはオルガンが一台据えてあつた。オルガンは内部の見えるように側面の板だけははずしてあり、そのまた内部には青竹の筒が何本も豎に並んでいた。僕はこれを見た時にも、「なるほど、竹筒でも好いはずだ」と思った。それから——いつか僕の家の前には佇んでいた。

古いくぐり門や黒塀は少しもふだんに変らなかつた。いや、門の上の葉桜の枝さえきのう見た時の通りだつた。が、新しい標札には「櫛部寓」と書いてあつた。僕はこの標札を眺めた時、ほんとうに僕の死んだことを感じた。けれども門をはいることは勿論、玄関から奥へはいることも全然不徳義とは感じなかつた。

妻は茶の間の縁側に坐り、竹の皮の鎧を拵えていた。妻のいまわりはそのために乾皮つた竹の皮だらけだつた。しかし膝の上のせた鎧はまだ草摺りが一枚と胴としか出来上つていながつた。

「子供は？」と僕は坐るなり尋ねた。

「きのう伯母さんやおばあさんとみんな鶺沼へやりました。」

「おじいさんは？」

「おじいさんは銀行へいらしたんでしょ。」

「じゃ誰もいないのかい？」

「ええ、あたしと静やだけ。」

妻は下を向いたまま、竹の皮に針を透とおしていた。しかし僕はその声にたちまち妻の嘘うそを感じ、少し声を荒らげて言った。

「だって櫛部寓ひようさつつて標札ひょうさつが出ているじゃないか？」

妻は驚いたように僕の顔を見上げた。その目はいつも叱しかられる時にする、途方とほうに暮れた表情をしていた。

「出ているだろう？」

「ええ。」

「じゃその人はいるんだね？」

「ええ。」

妻はすっかり悄気しよげてしまい、竹の皮の鎧よろいばかりいじっていた。

「そりやいてもかまわないさ。俺おれはもう死んでいるんだし、——」

僕は半ば僕自身を説得するように言いつづけた。

「お前だつてまだ若いんだしするから、そんなことはとやかく言いはしない。ただその人さえちゃんとしていれば、……」

妻はもう一度僕の顔を見上げた。僕はその顔を眺めた時、とり返しのつかぬことの出来たのを感じた。同時にまた僕自身の顔色も見る見る血の気を失つたのを感じた。

「ちゃんとした人じゃないんだね？」

「あたしは悪い人とは思いませんけれど、……」

しかし妻自身も櫛部某くしべに尊敬を持つていないことははっきり僕にわかっていた。ではなぜそう言うものと結婚したか？ それはまだ許せるとしても、妻は櫛部某の卑いやしいところに反つて気安さを見出している、——僕はそこに肚はらの底から不快に思わずにはいらぬものを感じた。

「子供に父と言わせられる人か？」

「そんなことを言つたつて、……」

「駄目だめだ、いくら弁解べんかいしても。」

妻は僕の怒鳴どなるよりも前にもう袂たもとに顔を隠し、ぶるぶる肩を震ふるわせていた。

「何と言う莫迦だ！ それじや死んだって死に切れるものか。」

僕はじつとしてはいられない気になり、あとも見ずに書齋へはいつて行つた。すると書齋の鴨居の上に鳶とびぐち口いっちようが一いっちよう梃ていかかつていた。鳶口は柄えを黒と朱との漆うるしに巻まき立ててあるものだった。誰かこれを持つていたことがある、——僕はそんなことを思い出しながら、いつか書齋でも何でも無い、枳からたち殻がき垣がきに沿つた道を歩いていた。

道はもう暮れかかつていた。のみならず道に敷いた石炭殻も霧きり雨さめか露ぬかに濡ぬれ透とつていた。僕はまだ余憤よふんを感じたまま、出来るだけ足早に歩いて行つた。が、いくら歩いて行つても、枳からたち殻がき垣がきはやはり僕の行手ゆくてに長ながとつづいてるばかりだった。

僕はおのずから目を覚ました。妻や赤子は不相あいかわらず変へ静じやうかに寝入つてゐるらしかった。けれども夜はもう白みかけたと見え、妙にしんみりした蟬せみの声がどこか遠い木に澄み渡つていた。僕はその声を聞きながら、あした（実はきよう）頭の疲れるのを懼おそれ、もう一度早く眠ろうとした。が、容易に眠られないばかりか、はつきり今の夢を思い出した。夢の中の妻は気の毒にもうまらない役まわりを勤つとめてゐる。Sは実際でもああかも知れない。僕も、——僕は妻に対しては恐しい利己りこし主義者ゆぎになつてゐる。殊に僕自身を夢の中の僕かならずと同一人格と考えれば、一層恐しい利己りこし主義者ゆぎになつてゐる。しかも僕自身は夢の中の僕かならずと必

しも同じでないことはない。僕は一つには睡眠を得るために、また一つには病的に良心の昂進こうしんするのを避けるために○・五瓦グラムのアダリン錠を嚙のみ、昏々とした眠りに沈んでしまった。……

(大正十四年九月)

## 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1999年2月1日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 死後

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>